



Title	日本・デンマーク交流史に関する一考察：静岡・デンマーク牧場におけるデンマーク人農業技術者エミール・フェンガーの活動（1963－64 年）について
Author(s)	佐保, 吉一
Citation	IDUN ー北欧研究ー. 2025, 25, p. 291-305
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100768
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日本・デンマーク交流史に関する一考察

ー静岡・デンマーク牧場におけるデンマーク人農業技術者エミール・フェンガーの活動（1963－64年）についてー

佐保 吉一

1. はじめに

今から約一世紀前の1923年9月23日、エミール・フェンガーEmil Fenger（1894－1983、以下フェンガーと表記）は北海道庁の招聘で、妻フリーダと2人の子どもを伴ってデンマークから札幌にやって来た。その背景には当時疲弊していた北海道農業をデンマーク式酪農で立て直そうという動きがあった。そしてその動きの下地にあったのが当時の「デンマーク・ブーム¹」である。このブームは1920-30年ごろにピークを迎え、その前後も含めて、多くの農業関係者がデンマークを訪問し、帰国後にその経験が雑誌や図書で発表されたのであった。なかでも北海道では農家を家族ごと招聘し、生活も含めてデンマーク農法を学ぼうという極めて珍しい試みを行なったのである。さて、北海道で5年間活動したフェンガーは²、1928年10月にデンマークに戻り、自ら営農するほか、農学校で教えたり、農協でも積極的な活動を行っていた。また帰国後に日本から多数の住み込み研修生達がやって来て面倒をみている。その内の1人が中曽根徳二（後に酪農学園大学教授）であった。中曽根は札幌時代の後半にフェンガーの元で働いて指導を受けており、1936-37年北シエランにあるフェンガーの元で暮らして、本場のデンマーク式酪農を実地で体得している。

そして戦後、日本の食糧事情が劣悪で、栄養価の高い牛乳や乳製品を産み出す酪農に期待された時期に、フェンガーは国（農林省）の招きで山形県新庄市に、妻のフリーダと共に滞在した（1951-54年）³。フェンガーは首相もその名を認識

¹ 内村鑑三が『デンマルク国の話（1913年）』を出版する以前から、デンマークは農業・組合・教育面において注目を浴び始め、同書出版以降、大正から昭和初期にかけてブームと称されるほど多数の日本人が同国を訪問した。

² フェンガーの札幌時代については次のものが詳しい。佐保吉一. 2006. 「大正時代北海道招聘デンマーク農家に関する一考察（前）ーエミール・フェンガーの書簡を中心にー」, 『北海道東海大学芸術工学部紀要』. 29. pp. 15-22. 佐保吉一. 2012. 「大正時代北海道招聘デンマーク農家に関する一考察（後）ーエミール・フェンガーの書簡を中心にー」, 『東海大学国際文化学部紀要』. 5. pp. 91-112.

³ 山形時代のフェンガーについては次のものを参照。佐保吉一. 2013. 「デンマーク人農業指導者エミール・フェンガーの山形時代（1951-54年）」, 『東海大学国際文化学部紀要』. 6. pp. 27-56.

し、国会でもその名前が登場する⁴など、戦前戦後を通じて今でいうデンマーク酪農のレジェント的存在なのである。さらに、キリスト教伝道団体からの要請で東京オリンピックの時期に第3回目の日本滞在（1963年3月～1964年10月、静岡県袋井市）を果たす。現在ではデンマーク牧場と呼ばれる場で生活し、牧場を一から立ち上げた。

フェンガーの業績や農業指導に関して、北海道及び山形時代については、招聘元が道庁や試験場といった公的機関であったため、公的な記録や報告書が存在する⁵。しかし、第3回目の静岡時代については、ノルウェーに本部を置く私的な宗教団体が招聘元であったため、日本側に日本語の記録としては殆ど残っていない。デンマーク牧場内に設置された新霊山教会が発行した40年史が唯一のもので⁶、他に市報『ふくろい⁷』にいくつかの記事が掲載されているのみである。それゆえ、フェンガーの静岡時代に関しては資料が少なく、学術研究も限られている⁸。

このような状況下、筆者が入手したデンマーク語の史・資料、初期のデンマーク牧場でフェンガーと共に働いた青砥好夫氏、西川求氏、通訳の嶋屋康男氏の遺族（嶋屋尚代氏）をインタビューして得られた結果（写真等含む、以下敬称略）⁹を用いて、不明な点が多いフェンガーの静岡時代における活動内容および人間関係、そして帰国の経緯に焦点をあてて考察したい。さらに帰国後のこと、特にデンマーク牧場自体の変遷を確認しながら、最後にデンマーク牧場の持つ歴史的意味をも考えたい。

1. デンマーク牧場、そしてフェンガー

1.1. デンマーク牧場

最初にデンマーク牧場とその設立背景について述べたい。デンマーク牧場とは

⁴ 第48回国会内閣委員会第25号（昭和40年4月1日）参照。

⁵ 例えば北海道庁内務部. 1924.『外人農家概況（第1次）』。北海道庁産業部. 1927.『外人農家概況（第2次）』。山形県立農業試験場特別報告第6号. 1957.『デンマーク農法指導農場業務報告』. pp. 1-66.

⁶ 日本キリスト道友会. 2009.『新霊山教会 献堂40周年記念誌』。

⁷ 例えば『広報 ふくろい』第75号（1963年5月）、第79号（1963年8月）、第85号（1964年1月）、第92号（1964年10月）。

⁸ 佐保吉一. 2017.「デンマーク人農業指導者エミール・フェンガーの静岡時代（1963-64年）」、『東海大学紀要文学部』. 108. pp. 55-70. 佐保吉一. 2019.「静岡・デンマーク牧場におけるデンマーク人農業指導者エミール・フェンガーの足跡 ―青砥好夫氏へのインタビューを中心に―」、『東海大学紀要文化社会学部』. 2. pp. 35-52.

⁹ 青砥のインタビューは注8の佐保吉一. 2019 参照。西川のインタビューは2022年4月9日にデンマーク牧場で行ない、嶋屋の遺族（嶋屋尚代）へのインタビューは2023年3月28日に山口県下関市今中の嶋屋宅で実施した。インタビューは許可を得て IC レコーダーに録音し、音源は佐保が有している。

静岡県袋井市山崎 5902 番地 167 を中心に位置する牧場施設一帯を指し、現在その中に神霊山教会、牛舎、牧場、特別養護老人ホーム、児童養護施設、自立援助ホーム、就労継続事業所、精神科診療所等が配されている。1962 年より土地買収が始まり、初期のブラザーホーム設立プロジェクト計画から、後述する様々な変遷を経て現在の姿に落ち着いている。

1.2. 新霊山（教会）プロジェクトおよび日本キリスト道友会

ここでまずフェンガーの来日を要請した宗教団体について述べておきたい。1920 年代にノルウェー人宣教師カール・ライシェルト Karl Ludvig Reichelt が、キリスト教を仏教徒に宣教することを目的に、宗教団体であるクリスチャン・ミッション・オブ・ブッディスト Christian Mission of Buddhist (ノルウェー語: Den Kristne Buddhistmisjon, 以下 CMB と略、本部はオスロ) を設立した。そしてその布教の中心を香港の道風山 Tao Fong Shan と呼ばれる施設（ブラザーホーム）に置き、対話を基とするキリスト教と仏教（徒）を結ぶ活動を開始した¹⁰。

その組織から日本へ宣教師として派遣されたのがデンマーク人のハリー・トムセン Harry Thomsen (1928-2008, 以下トムセンと略) であった。彼は妻のイーネ・マリエ Ene Marie (1931-) と共に 1950 年代後半まず京都にやってきて、修学院を中心に布教活動を始めた¹¹。しかし、香港の道風山に相当する拠点を何としても日本でも設立したいと強く願うようになり、トムセンは野心的なプロジェクト案を CMB に提出した¹²。トムセンの計画の骨子は次の通りである。これまでスカンジナビアからの布教は都市部が中心であったが、あらたに人口の大半を占める農民をキリスト教布教のターゲットとし、農村での布教をより進展・成功させるために農民が興味を示しそうなデンマーク農業（酪農）を実践する農場を備えた農業センター及び農学校の設置、そして布教の中心となる教会の設置、さらに異なる宗教を持つ者が集い交流する場としてのブラザーホームを建設する。

1962 年前半、彼の熱意が功を奏し、教会本部がその案を承認した。プロジェクトの舞台となる土地を探すために、通訳の嶋屋康男と約半年間日本全国を回り、東京と京都の中間点にある静岡県袋井市の山あいの土地を見つけた。トムセンは拠点を新霊山 Shin Rei San と名付け、CMB 本部の許可を得た上で、1962 年より

¹⁰ それ以前に中国本土でも活動を行っていたが、社会主義国である中華人民共和国の成立で、先行きに不安を感じ、香港に拠点を移したのであった。

¹¹ ハリー・トムセンはオーフス大学で英文学及びキリスト教学の修士号を得た後、1955 年に看護師のイーネ・マリエと結婚した。その後、正牧師になった。

¹² Hermansen, Christian M. 2016. 「Harry Thomsen and Shin Rei San : The Foundation of a Brother Home for Truth-seekers (安田雅美教授 廣瀬典生教授 退職記念号 栗林輝夫教授 追悼記念号)」, 『外国語・外国文化研究 (関西学院大学法学部)』 .17. pp. 223-261.

本格的な土地の売買交渉を開始した。周囲が農家ということもあり、布教を進展させるためにデンマーク式農業を行う酪農場、さらには寝食を共にして酪農技術を学ぶ農学校も合わせて建設することになる。この農場の酪農指導者として、次項で述べる日本での農業指導経験が豊富なフェンガーに白羽の矢が立ったのである。247 筆にわたる土地の取得は地元協力者の尽力もあって進展し、最終的には13 万坪（約 50ha）の丘陵地を取得している。

写真1 デンマーク牧場全景(1970 年頃)



そして本格的な布教活動の嚆矢としてまず、1964 年には、宗教法人「日本キリスト道友会」が静岡県袋井市山崎に設立され、静岡県に登記された¹³。以来地元では、その所有地や宗教法人が「デンマーク牧場」あるいは「トムセン牧場」と呼ばれている。そして 1965 年秋、教会の献堂に

先立って、スカンジナビア酪農センター及び最新の酪農技術を学ぶ付属農学校が竣工し、特徴ある宣教が本格的に開始されるのである。

1.3. フェンガーと 2 回の日本滞在

エミール・フェンガーは、本名をカール・エミール・ハウク・フェンガー Karl Emil Hauch Fenger といい、ユトランド半島北西部のビールリング Bilring（現 Bildring）村に 1894 年 5 月 25 日に誕生した。フェンガー家は代々続く農家で、エミール・フェンガーは最終的にはコペンハーゲンにある王立農業大学 Landbohøjskolen を卒業している。卒業後彼は自ら農業実践を行う傍ら、シェラン島北部にあるスランゲロプ農業学校 Slangstrup Landbrugsskole で教員も務めていた新進気鋭の農業専門家であった。このフェンガーが 1923 年 2 月、たまたま目にした北海道での農業指導者募集に関する新聞記事が、その後の彼の運命を変え、長い日本との付き合いが始まるのである。

フェンガーは数ヶ月後にデンマークで実施された北海道庁による選抜に合格し、早くも 1923 年秋、一家 4 人で関東大震災直後に来日した。割り当てられたのは札幌市郊外の琴似にある北海道農業試験場であった。ここで 5 ヘクタールの土地の提供を受け、デンマーク式の混合農業を単独で行なった。フェンガーは 5 年契約満了の 1928 年 6 月まで任務を果たし、帰国直前の 4 月に開校した農学校（北海道農事試験場農業練習生農場）の開設準備および初期教育にも尽力している。

¹³ 設立決議録（昭和 39 年 6 月 1 日付）には、出席者としてハリー・トムセンの他フェンガーや通訳の嶋屋康男の名前も記載されている。

そして第二次大戦後、GHQ の占領下、日本では食糧不足となり、国民の栄養不足を解決するために牛乳や乳製品を作る酪農に期待が集まっていた。そのような背景の中でフェンガーを再招聘しようという動きが出てきた。具体的には山形県知事が当時の吉田茂首相に受け入れを直談判し、最終的には日本政府の要請によりフェンガーの第 2 回日本滞在が実現する。1951 年 3 月にフェンガーは夫婦で来日し、農林省に雇用される形で山形県新庄に同年 11 月末に赴任した。新庄には「デンマーク農法指導農場」が設置され、ここでフェンガーは約 3 町 9 反歩の耕地で酪農を実践してみせた。指導農場でのフェンガーの立場は、酪農すること自体（営農）が目的であった北海道時代とは異なり、雇用元が国（農林省）であり、主な担当地域が東北全体ということもあり、顧問・コンサルタント的なものであった。

1.4. フェンガーの第 3 回日本滞在 ―静岡―

さらにフェンガーは日本が戦後復興をはたし、高度経済成長期の 1963 年に第 3 回目の訪問を果たす。今回の活動の舞台は富士山の麓に位置する静岡県袋井市である。この地へはノルウェーに本部を置くキリスト教伝道団体（CMB）から、農場及び農学校の立ち上げへの協力要請を受け、来日したのであった。第 3 回目の滞在については、これまでとは異なり旅費は支給されず、フェンガーは、農場や農機具を売却して工面した。しかし、来日を要請されていたにも拘わらず、到着した横浜港へは誰も迎えに来なかった。想定外の扱いにさすがのフェンガーも落胆する。そして一事が万事、この出来事が最後まで尾を引くのである。

2. 静岡におけるフェンガーの生活と活動

2.1. 牧場での活動

まずフェンガーが初期のデンマーク牧場においてどのような活動を行っていたのかをみてみたい。土地購入時、一帯は木々が生えた未開拓丘陵地帯であったため全く一から開墾する必要があった。開墾作業を高齢のフェンガーが一人でこなすのは無理であった。そこで旧知の中曽根を通じて酪農学園から農業助手がやって来た。まず 1963 年 7 月に青砥好夫が、そして後の 1964 年 4 月には西川求がやって来た。車の運転が得意な青砥は、当時はまだ珍しかったファーガソンのトラクターで作業した。草刈りを施す際にはデンマーク式の大鎌が用いられたが、余りの重労働で 20 代前半の青砥は 70 歳のフェンガーには敵わなかったという。また飼料となる牧草やデントコーンを作付けするために山焼きをし、丘陵の尾根伝いに杭を打って柵を作り、放牧の準備をしている。

さらにフェンガーは、山形時代でもそうであったが、デンマーク牧場の土壌を

デンマークに送って分析してもらい、その結果を受けて酸性土壌を中和するために大量の石灰を投入した。農業に科学の力を利用するのがデンマーク農法なのである。なお、その石灰を山の上まで運ぶ作業は若者でもかなりの重労働であったが、年老いたフェンガーは率先して作業を行なったという。

1963 年末までに牛舎や牧場の準備がある程度整ったため実際に牛を入れることになった。各地の牛の価格を調査した結果、最も適当な価格である北海道から取り寄せることになった。そこでフェンガーは中曽根に連絡を取って 5 頭の牛の入手を依頼し、それらを青砥が北海道へ帰省した帰りに貨車で最寄りの袋井駅まで連れてきたのである。

一方で 1964 年 3 月に、農作業を手伝うなかでデンマーク式酪農を学ぶという目的で、中曽根を通じて酪農学園から 6 名の実習生がやって来た。彼らは酪農学園開拓同志会に所属しており、牛舎の横に位置する青砥と西川が住む宿舎で寝食を共にした。彼らは朝食後 8 時から 12 時まで、主に牧場に柵を設置する作業を行ない、午後はフェンガーに所望して飼料や家畜の扱い方についての特別授業を受けた。「短期間では大して教えることは出来なかったが、賢い人たちがよく学んだ」と、フェンガーは『自伝』で述懐している¹⁴。

写真 2 測量をするフェンガー



写真 3 牧場でのフェンガー夫妻



1964 年 4 月には西川求が農業助手として新たに加わった結果、フェンガーらの作業も進み、次第に山の斜面が牧草地化してきた。そして、牛 20 頭以上の夏用飼料が準備でき、牛舎にも場所があったため、フェンガーは一年中放牧が可能な肉牛の導入を計画した。早くも 1964 年 7 月にオーストラリアから 15 頭のヘレフォード牛が到着している。

青砥と西川の仕事のルーティンは、まず早朝に起床して一仕事した後に搾乳し、そして牛たちを放牧した後、フェンガーとは別に宿舎で自炊して昼食をとった。

¹⁴ Fenger, Emil. 1970. *Langs med vejen* (道のまに). København: Nyt Nordisk Forlag (以下、『自伝』と略), 189 頁。なおフェンガーは宿舎から聞こえてくる彼らの讃美歌にもいたく心を打たれている。普段は一人で作業をする青砥も仲間が出来て嬉しかったと述懐している。

時折、フェンガー宅でフリーダの手料理を食べる機会もあった。また牛の飼料に関しては、牛の体重、体格、乳量に合わせて飼料を与え、非常に計算された科学的な農業だったと西川は述懐している¹⁵。

また日本ではユニークな実験が行われている。傾斜地を耕起せずに牧草を植えるのである。普通であればまず綺麗に耕してから牧草の種を植えるのであるが、フェンガーは丘陵地そのものに種と肥料を蒔き、それを牛に踏ませるのである。そうすると芽が出て牧草地になるという具合である。この方法を用いると起伏に富む日本の丘陵・低山を有効利用できるのである¹⁶。

フェンガーと共に活動する中で青砥と西川はデンマーク式農業の要点を数々学んでいる。例えば家畜用ビーツは、種を蒔いた後普通は手で間引くのだが、フェンガーは鋤で間引くことを教えた。さらに機械をうまく使用して効率的に作業をする方法など、道具と機械を利用する農業、非常に計算された科学的な酪農を体得している。そして農閑期には使用しない農機具の点検・修理を行ない、丁寧にメンテナンスすること、機械や道具を大事にすること等、「質素で手作業を惜しまない基本を教えて貰った」と西川はインタビューで述べていた。

こうして、1965年2月にムラーが到着した際には「立派だ」と評した農場（牛舎、牧草地、サイレージ）が立ち上がっていたのである。

2.2. 日常生活

フェンガー夫妻はトムセンが想定していたよりも早く日本に到着したため、住宅の準備が整っておらず、最初の半年は土地売買交渉人の所有農家に居住した。そこには椅子はあったが、住居は和室であった。そして1963年9月には完成したばかりの5LDK（1室は洋間）の新居に入居した。

フェンガーの生活費（給料）はCMBから支給されたが、近隣で食料品等の買い物ができないため、週に一度はタクシーに乗って買い出しに行っていた。妻のフリーダは住居も小さく家事にも時間を割く必要がないため、時間に余裕があった。そこでボランティアで高校生に英語を教えることになる。近隣の高校に出かけていき、希望者を募ったのである。そこでセツコという女子学生が名乗りをあげ、約半年フリーダのもとに通った。

フリーダはまた望まれて週2回青砥、西川、そして嶋屋の妻尚代にも英語のレッスンを行なっていた。レッスンの終わり頃には赤ん坊を連れた嶋屋康男も姿を見せ、しばし、今風の言葉でいう「ヒュッゲ」、楽しいお茶の時間となったことが『自

¹⁵ いわゆるスカンジナビア飼料計算というもので、いまだに西川はその飼料計算方法を用いていると語っている。

¹⁶ 青砥へのインタビューでは、それが思うほどの成果が上がらなかったという。フェンガーが直ぐに帰国したりして時間が短すぎたというのである。佐保吉一. 2019. 42 頁参照。

伝』に記されている¹⁷。またインタビューによると青砥と西川はフェンガーからデンマーク語も習い、辞書も購入したとのことである。

そしてフェンガーの一日の締めくくりは、夕方の散歩であった。これは北海道時代からの習慣で妻のフリーダと共にパイプをくゆらしながら牧場内をゆっくり回るのであった。

また月に一度程度は夫婦で上京し、デンマーク＝日本協会の行事に参加したり、農林省の友人達と会って旧交を温めた。今回の滞在は、札幌・山形時代とは異なり、私的なものであったため、拘束も無く自由がきいたのであろう。

2.3. 牧場での人間関係 –フェンガーとトムセン–

初期のデンマーク牧場にはトムセンと彼のプロジェクトを助けるために CMB から宣教師とその家族が派遣されていた。デンマーク人のオーラフ・ロースゴー Olaf Roesgaard とノルウェー人のオースル・ランデ Aasulv Lande である¹⁸。どちらも 1970 年代前半に日本キリスト道友会の代表役員を務めているが、ロースゴーとランデはなによりまず日本語を学ぶ必要があったために神戸や京都といった静岡以外に滞在することが多かった。それゆえ、常時デンマーク牧場にいる CMB 関係者はトムセンのみであった。本稿ではこれまで十分に確認できなかったフェンガーとトムセンの関係を、実施したインタビューを中心にみてみたい。

まず、トムセンとも接する機会が多かった青砥によると「フェンガーは無口で優しく実直、酪農には厳しくプライドと使命感を持っていた・・・トムセンは気分にもうらがあり、機嫌の悪いときには気難しく、気を遣う相手であった・・・日本は当時、東京オリンピックの時代、高度経済成長時代で、工業化が進み、酪農に目を向ける人がいなかった。その中で、トムセンは資金を背景に壮大なビジョンを持っていたが、それは時代に合わなかった。フェンガーもそれに気がついて¹⁹」。また酪農のことは分からないトムセンがフェンガーの活動に口を挟む姿をよく見たという。一方、青砥より約一年遅れてデンマーク牧場にやって来た西川は次のように述懐する。「フェンガーは社交的ではなく、頑固というか一徹のところがあった。そのフェンガーは農場の責任者で、トムセンは全体の責任者であったが、そもそもトムセンと接する機会も少なかったため、2 人の関係の悪さについてはよく分からなかった」。そして、通訳としてフェンガーとトムセンの間で板挟みにもなっていた嶋屋康男の妻尚代は「フェンガーさんは優しい方で帰国後もずっと手紙のやり取りがあり、子どもの誕生日やクリスマスには必ずカードを

¹⁷ 『自伝』、189 頁。

¹⁸ ノルウェーからはテレ Notto Raidar Thelle も来ていた。

¹⁹ 佐保吉一、2019、42-43 頁参照。

送ってくれた。またトムセンは宗教者というよりビジネスマンのであった。人当たりがよく誰の懐にもすっと入っていける人ではあったが、白人至上主義みたいなものを持っていると感じた」という。なお嶋屋尚代によると、家庭で夫の康男はトムセンの悪口は言わなかったという。トムセンと関わりの深い者のインタビューから浮かび上がるのは、70歳で堅実なフェンガーと36歳で社交的ではあるがビジネスマンのようなトムセンとの性格・考え方の相違から生じる関係の悪さである。フェンガーは『自伝』のなかで迷ったが記録の為に記すというスタンスで、決してトムセンの名前を出さずに宣教師と記載して、同情しながらも、プロジェクトを遂行できる器ではないと記している²⁰。

ここでトムセン側がフェンガーのことをどう思っていたのかをみてみたい。まずトムセンの妻のイーネ・マリーネのインタビューでは、フェンガー夫妻は早く来日しすぎたこと、以前に日本に滞在した経験もあるのに、農民の自宅に土足で上がってくるといふ苦情が寄せられたこと、さらにフェンガーが様々な要求をしすぎたこと等印象の悪さが述べられている²¹。さて、フェンガーとトムセンの関係について、最近トムセン側の衝撃的な記録が明らかになっている。「ここにいる我々みな、他の外国人や日本人も含めて、フェンガーたちが帰国して安堵した *drage et dybt lettelsens suk* ²²」というのである。ここまで来るとトムセン側のフェンガーに対する嫌悪感はあるからさまで、異常でさえある。

このようにデンマーク牧場におけるフェンガーとトムセンの関係は、予想以上に悪化しており、特にトムセン側の嫌悪感が明らかであった。

²⁰ 『自伝』, 182 頁。

²¹ Hermansen, Christian M. 2015. 「Ene Marie Thomsen: Her Missionary Years in Japan 1955-1966」, 『キリスト教と文化研究 (関西学院大学)』, 17. 130-131 頁。なおインタビュー当時イーネ・マリーネは 82 歳、約 45 年前の出来ごとに対する記憶が修正 modify されている可能性もあることを筆者の Hermansen も指摘している (133 頁)。

²² Christensen, Asger Røjle. 2023. *Hokkaido - danske landbrugspionerer i Japan*. København: Turbine, s. 244. 残念ながら出典が明示されていない。なお、この一文の前にフェンガーの二面性に触れ、良くない時は「あたかも邪悪な悪魔 *ond dæmon* に取り憑かれたように…」と尋常でない表現が用いられている箇所がある。本書はフェンガー達の来日 100 周年を記念して出版された労作ではあるが、ジャーナリストの著者が事実を重視するあまり、極めて残念であるが出典注や文献リストを欠いている。また同書はトムセン側の記述を無批判にそのまま用いる傾向があるため、フェンガーに対する評価は概して低いように思われる。

3. 帰国

上にみたトムセンとの関係の悪さがフェンガーの帰国につながったか否かについてはこれまで、不明であった。しかし、今回入手できたロースゴーの家庭内記録により、トムセンがフェンガーとの協力関係が絶たれるべきである *mätte afbrydes* と CMB に書き送ったことで、CMB 側でも二人の不仲を把握したことが判明した²³。これがこの後どうフェンガーの早い帰国につながったのかは依然不明である。フェンガーの帰国が正式に決まった時期、それをフェンガーはどう

写真 4：袋井駅での見送り



受け取り、関係者にはいつ、どう知らされたのか²⁴、ということも今後の課題である。帰国の経緯についてはフェンガーの『自伝』は沈黙しており、帰国の日程も明示されていなかったが、今回入手した嶋屋家のアルバム写真の日付で 10 月 30 日に袋井を発ったことが判明した。

トムセンとの関係もあり、フェンガーはデンマーク牧場での送別会は期待していなかった。それだけに嶋屋一家、青砥、西川によるお別れ会には感銘をうけ、『自伝』にも記している²⁵。デンマーク牧場を発つ際にも牧場の下地を作ったフェンガーに対してトムセンは見送りを含めて一切何もせず、嶋屋尚代も「それが全てを物語っている」とインタビューで述べている。

4. 帰国後のフェンガーとデンマーク牧場

4.1. デンマーク帰国後のフェンガー

1964 年末に日本から帰国したフェンガーは、出発前に貸し出した農場はそのままにし、1965 年夏にはユトランド半島にあるアスコウ・ホイスコーレ（国民高等学校）に夫婦で滞在している。この後、高齢のため農地を売却していよいよ悠々自適の生活に入る。生来筆まめな性格を有し、日本との交流も続く。特にデンマーク牧場にある農学校の校長ムラーとは連絡を取っていたようで、生徒募集に苦勞している様子も『自伝』に書かれている²⁶。また嶋屋家の子ども達へも誕生日や

²³ オーラフの長女 Marieさんから提供いただいた情報である。

²⁴ ある時フェンガーと一緒に撮った写真の裏に紹介状を書いて、これを見せればどこでも雇って貰えると嶋屋に言っていたという（実は嶋屋はその写真をアルバムに貼ってしまった）。このエピソードは恐らく自分の帰国が分かっていたからだと思われる。

²⁵ フェンガーは山形時代から農林省にも知人が多く、帰国直前の横浜滞在中、多くの友人が別れの宴席を設けてくれたことを『自伝』に記している（191 頁）。

²⁶ 『自伝』、195 頁。

クリスマスのカードも欠かすことがなかった。

そして 1968 年にはフェンガーが贈った寄付金 2 万クローネが基金となり、日本で青年に対する酪農関係の賞、すなわちエミール・フェンガー賞（男性対象）及びフリーダ・フェンガー賞（女性対象）が創設されている²⁷。長年苦勞を分かち合った妻フリーダの名を冠した賞が設けられたことに彼はとりわけ喜び、そのことを『自伝』に記している²⁸。さらに、1968 年のクリスマスには明治維新 100 周年を記念する叙勲（瑞宝章）の吉報を伝える電報を受け取っている。

一方、以前同様日本からは様々な人物が北シェランにあるフェンガー家を訪れている。『自伝』によれば、例えば雪印や酪農学園の重鎮である黒澤西藏、山形県知事、農林省の三宅局長、皇族では寛仁親王がいる²⁹。

また、日本では山形時代のフェンガー夫妻の住居跡が保存修理工事を終えて 2004 年より、山形県立新庄神室産業高等学校の敷地内にフェンガー記念館として残され、公開されている³⁰。さらに最近の調査で判明したことであるが、フェンガーは山形県新庄市に滞在中に収集した日本の農具をデンマーク国立博物館（コペンハーゲン）に寄贈している。その一部、例えば簞が現在も同館日本セクションに常時展示されている。

そして、1970 年にはこれまでの 75 年の人生を自分なりに振り返る自伝『Langs med vejen（道のままに）』を出版している³¹。最後はライオンズクラブの運営する老人ホームでゆっくり余生を送っていたフェンガー夫妻は 1983 年 6 月に死去している。これまで死去に関する確実な情報は無かったが、今回現地新聞 Frederiksborg Amt Avis の訃報欄情報で最初はフリーダ（6 月 9 日）、その僅か約 3 週間後（6 月 28 日）にエミールが亡くなっていることが確認出来た³²。

4.2. フェンガー帰国後のデンマーク牧場

4.2.1. 農学校

フェンガーの帰国後、後任として農業の名門校ハメロム Hammerum から校長を長年勤めたクリスチャン・ムラー Kristian Møller (1894-1984) が、1965 年 2 月に夫人を伴って着任した。フェンガー同様往復の交通費は自前で、滞在中は生活費が支給された。そして、フェンガーの時代から準備された農学校がいよいよ

²⁷ 全国農業青年交換会において選抜され、受賞者には小さなデンマーク国旗が埋め込まれた銀杯も授与された。なお、これらの賞は財政的理由で 2013 年度が最後の授与となっている。

²⁸ 『自伝』、196 頁。

²⁹ 同上。

³⁰ Cf. https://shinjokamuro.jp/memorial_hall 2024.11.29 アクセス

³¹ 書誌情報は注 14 参照。

³² Asger Christensen 氏から提供いただいた情報（新聞訃報欄の写真）である。

1965 年 11 月に開校される。講師陣には出納陽一、中曽根といった酪農学園大学関係の専門家を擁し、地域の専門家も講師となった。授業内容は日本側からの要望もあって家畜の飼育におかれた。ただ残念なのが入学者数である。初年度は 3 人、次年度は 9 人であった。ムラー自身は「当時は農村から人口が流出する時代で、他の農業学校でも閉鎖や少人数での運営が続いていた。このような時にデンマーク式農業の知識とメソッドを教える我々の学校には利点がある・・・一度学校のことが世間に知られれば生徒は増える³³」と考えていた。しかし、当時の日本は高度経済成長期で農村から都市への人口流出が続いており、目論見通り若者が集まらなかった。さらに、為替の状況も悪化した上に北欧からの資金援助も途絶えたため、1974 年には農学校が閉校されてしまう。その後学校施設を利用して、フリースクールとして、不登校や引きこもりを抱える子ども達を対象とした共同生活寮「デンマーク牧場こどもの家」と形を変えて存続したのであった³⁴。

4.2.2. トムセンの帰国

フェンガー帰国後、当初のプロジェクトに多大な影響を及ぼす変化が訪れている。トムセンの離脱である。まず 1966 年、トムセンは妻の病気を理由に一家でデンマークに一時帰国する。その後 1967 年初頭にトムセンだけが戻ってくるが、1967 年末には永久帰国した。トムセンがなぜ自ら熱心に推進していた新霊山プロジェクトから突如手を引いたのかは不明である³⁵。しかし、強力な推進者を失った後のデンマーク牧場の歩みは困難続きであった。進行途中のプロジェクトを中止する訳にもいかず、残された者がまず予定された教会堂を作り上げ、そして牧場と農学校を維持していった。トムセン帰国の一方で、初期のデンマーク牧場を支えた面々はそれぞれの事情から牧場より去って行く。西川が 1965 年 7 月、青砥が同年 10 月に退職した³⁶。また通訳の嶋屋も 1967 年 11 月に退職している³⁷。初期の連帯感や経験が消失してしまったのである。

³³ Møller, K. 1974. *Sælsomt slynges de træde*. Herning: Poul Kristensen, s.212.

³⁴ この時期については次のものが詳しい。高橋良臣, 1981a. 『デンマーク牧場からのこどもたちの復活 ―登校拒否をのりこえて―』。あすなろ書房。高橋良臣, 1981b. 『デンマーク牧場から よみがえった仔羊 ―登校拒否児とジープン牧師―』。あすなろ書房。なお、収益事業として牧場経営は 1990 年まで継続された。

³⁵ トムセンは帰国後デンマークの大学で英文学と比較宗教について講じ、後にアメリカのコロラドへ移住し、同地で 2008 年に死去している。

³⁶ 西川は後に北海道瀬棚に入植し、西川牧場を設立した。一方、青砥は牧師となり、男鹿教会、玉川教会、釧路教会等に赴任している。

³⁷ 嶋屋は郷里の山口県に戻り、現在も続く牧場を経営した。2019 年に逝去。

4.2.3. 日本福音ルーテル教会との合同

上述のようにトムセンの突然の帰国、そして農学校の不振・閉校、さらに北欧からの資金が途絶えるという苦難が次々とデンマーク牧場を襲う。そのような状況下、法人の運営も北欧から派遣される宣教師陣から日本人の手に託され、そして1985年には日本キリスト道友会と日本福音ルーテル教会との法人合同が実施された。以後、教会も新霊山教会としてルーテル教会から牧師が着任するようになる。

さらには1992年、婦人会から老人ホームを含むデンマーク牧場福祉村構想が提起されたことが画期となり、2003年には社会福祉法人デンマーク牧場福祉会が法人認証され、現在の発展につながるのである³⁸。

5. おわりに

以上、フェンガーの静岡における活動内容をみてきたが、その活動期間は予定より短く、僅か1年7ヶ月であった。しかし、彼の帰国後に到着した農業専門家でもあるムラーが「フェンガーはデンマーク風の立派な牛舎とサイレージ貯蔵庫を築いた byggede en udmærket kostald efter dansk mønster og ensilegebeholder³⁹」と評価したように、フェンガーは後に発展する牧場の基礎作りを行なったのである。未開墾地から畑と牧草地を作りあげ、牛もまず北海道から乳牛5頭、オーストラリアから肉牛15頭、デンマークから赤牛を17頭導入した。そして山形時代から親交のある農林省の友人達との交流を通じてデンマーク牧場のことを宣伝する中で、情報交換をしている。特に検疫等の関係で、当時外国から牛を輸入することは困難だという状況下、贈り物にすればよいという情報を得て実行し、デンマーク赤牛等の導入が実現したのであった。

またフェンガーの筋で酪農学園大学の出納陽一や中曽根たちが、農学校の講師に招聘されている。このようにフェンガーは滞在期間こそ短かったが、黙々と牧場発展の土台を築き、見えない部分でもデンマーク牧場のために準備を整え、次の時代へと繋いでいるのである。さらに関係者にデンマーク式農法を身をもって教え、その方法を受け継いだ西川のような人物も輩出している。

今回新しく判明したことが数点ある。まず、上記で見たように、フェンガーの死亡日が1983年6月28日であることがデンマーク側の資料（新聞）で確認出来た。またフェンガーとトムセンの関係について、これまでフェンガー側の資料では、陰悪であることが判明していたが、今回特にトムセン側のフェンガーに対す

³⁸ その発展の紆余曲折については次のものが詳しい。山本裕. 2009. 「祈りと戦いの日々」, 『新霊山教会献堂40周年記念誌』. 日本キリスト道友会. 53-58頁.

³⁹ Møller, op.cit., s. 194.

る異様なまでの嫌悪が確認出来た。そして、フェンガーとの関係悪化の件に関しては、まずトムセン側が動いて CMB に訴えたことが明らかになった。

今後の課題であるが、フェンガーの予定より早い帰国の真の経緯は不明なままである。最終的帰結として本人からの申し出があったのか、あるいはトムセンの訴えにより CMB が判断・指示したのか。これらの点については CMB 内の議論も含めてオスロのアレオパゴス（旧 CMB）に残された資料に当たって是非解明したい。

最後にデンマーク牧場の歴史的意味について考えてみたい。トムセンが情熱的に推進したデンマーク牧場でのプロジェクトは、結局本人が途中で離脱したために、農学校も破綻し、真に目指したブラザーホームも建設されなかった。だが、同牧場は現在福祉村に姿を変え、教会も存続し、地域社会に無くてはならない存在として根付いている。またデンマーク牧場という名前は継続されている。それぞれ夢を持ちながらもプロジェクトの終了で帰国した宣教師達も各々の立場で日本との関係を持続したが、その次の世代は、日本国外に居住しながらも日本語を流暢に用い、独自に日本との繋がりを持し、そして例えば研究者として活躍している⁴⁰。長い目で見ると当初の目的は果たせなかったが、第 2 世代が日本への関心を持ち続け、日本との交流を続けていることは意義深い。成長する種子が静岡県袋井の地に蒔かれたことは確かである。

〔付記〕田邊欧先生とは大阪外国語大学デンマーク語学科時代からの長い付き合いです。これまで外大時代の良き伝統を守ってきて下さったことに敬意を表します。今回は田邊先生が以前ご家族とも訪問したことがあるという静岡のデンマーク牧場を記念論集のテーマとしてとりあげました。

最後に、多忙中インタビューを受けて下さった上に、写真の複製を許可いただいた青砥好夫さん、西川求さん、嶋屋尚代さんに記して感謝いたします。再会を約していた西川求さんが本稿執筆中に急逝されました。心から哀悼の意を表します。

⁴⁰ トムセンの長男である Erik はニューヨークで日本美術のギャラリーを運営するディーラーで、次男である Hans Bjarne は現在チューリッヒ大学で東アジア美術史の教授、末っ子の Inge Sigrun Brodey はサウスカロライナ州立大学教授で比較文学（例えば夏目漱石）が専門である。ロースゴーの長女の Marie はコペンハーゲン大学国際交流学科准教授で日本研究を行ない、ランデの長女アンネ Anne Lande Petas はノルウェー文学の翻訳家として活躍している。なお、フェンガーには 4 人の子ども Friz, Lis, Aase, Frank がいた。Fritz はアメリカに移住し、Aase と Frank はカナダに移住しており、デンマークに残ったのは日本生まれの Lis だけであった。その内 Aase は 2000 年に北海道を訪問して大歓迎を受けている。またフェンガーの孫が、アメリカで中曽根徳二の孫と同じ地区の獣医という立場で知り合っているということに不思議な縁を感じる。

A Study on the History of Japanese-Danish Exchange

—The Activities of a Danish Agricultural Engineer Emil Fenger on the Denmark Farm in Shizuoka, Japan(1963-64)—

Yoshikazu SAHO

Summary

The objective of this paper is to elucidate the role and contributions of Emil Fenger (1894-1983), a Danish agricultural engineer, on the Denmark Farm (Denmark Bokujo) which is situated in the southern region of Fukuroi City, Shizuoka Prefecture. The property encompasses an area of 50 hectares. The site is currently occupied by a number of ecclesiastical, agricultural, and livestock structures. The land was purchased in 1962 by Harry Thomsen, a Danish missionary dispatched by the Christian Mission of Buddhist (CMB, now called Areopagos). And Emil Fenger was asked to come to Japan in order to prepare and start dairy farming.

For Fenger, this was the third occasion on which had resided in Japan. His first experience in Japan was in Sapporo (1923-1928), and his second was in Yamagata (1951-1953). During his tenure in Shizuoka (1963-64), Fenger and his wife arrived in March 1963 and remained there until October 1964. Fenger's role was to undertake preparatory work for the establishment of an agricultural school with an apprenticeship farm on the Denmark Farm, which was to serve as the centerpiece of the project in the near future.

The farm was primarily cultivated by Fenger and his agricultural assistants, Yoshio Aoto and Motomu Nishikawa. By the time of the Tokyo Olympics, basic preparations were in place.

Fenger returned home at an earlier-than-anticipated juncture, though the initial contract remains unidentified at this time. The reasons for this remain unclear due to a lack of historical documentation. However, interviews with those involved have revealed that there were unbridgeable differences of opinion between Fenger (70 yrs) and Thomsen (36 yrs), an idealist project manager and evangelist. The other source shows that Thomsen sent a report of the breakdown in cooperation with Fenger.

Consequently, the next logical step would be to investigate the archives of the association in question, Areopagos (former CMB).